

件名	IPv4・IPv6 対応 P2P デバイス連携プラットフォームの開発
契約先	株式会社ニューロン
PM	後藤 滋樹

1 プロジェクトの要点・目標

ここで目標としていたのは、IP電話のようにSIPを用いた通信がNAT (Network Address Translation)によって阻害される問題を解決することである。この技術(NAT越え)に関しては、既に各種の提案があり、標準化の推進が行なわれている。ただし既存の個々の技術は互換性に乏しく、今なお現実にはNAT越えの問題が残っている。

本件で開発するソフトウェアを搭載すれば、ルータにおけるNATの種類を自動的に検出して、適切なNAT越えの要素技術を選択することができる。つまり、個々の要素技術の集合体として総合的な技術が確立できる。これは実用上の価値が大きい。

なおNATという技術はIPv6が広く普及した時点には使われなくなると予想される。この点を考慮して、IPv4とIPv6とが混在した状態を本件の技術のカバーする範囲に含めている。この配慮は現実の状況を踏まえたものであり、適切な方針である。

2 ソフトウェア開発成果に対する評価

本件で開発されたソフトウェアは当初の目標を満たしている。ソフトウェアの実装は、Windows, Linux, TRONの三つのプラットフォームに対応している。本件の成果を活かすためには、実地の応用に広く使われることが肝心である。開発者は実用化に向けた活動を行っており、その点を高く評価できる。

3 プロジェクト評価

本プロジェクトは担当者(契約先)の持つ技術をベースに、今日的な課題に取り組むものである。上述したように要素技術を総合的に組合わせた点が実用的であり、先進性がある。世の中ではIP電話が既に十分に普及したと思う向きもあるが、現実にはISP(プロバイダ)ごとに囲い込まれたドメインの中だけで十分に使うことができる。真のグローバルなIP電話の相互通信については、今なお課題がある。(例:総務省の次世代IPインフラ研究会でIP電話の相互接続を取り上げたのは2004年度になってからである)。

本件の成果が世の中に普及するためには、今後の活用が必要である。本件で開発したソフトウェアは単体で動くものではなく、通信機能の一部を構成するものである。このようなソフトウェアは開発者が独力で販売するものではなく、いずれかの商品、システムの中に組み込まれて使われる。この点を意識して、今後とも、いろいろな機会を捉えて成果のアピールを行なって頂くことを期待している。

以上